

第1回 災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナーを開催しました (2016/11/29)

テーマ：都市環境と災害と健康
場所：東北大学医学部（宮城県仙台市）

11月29日（火）に本学医学部6号館1階カンファレンス室にて、第1回災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナー（主催：災害科学国際研究所「災害と健康」ユニット、「減災システムの提案」ユニット）が開催され、当研究所の村尾修教授が講演を行いました。同セミナーは、災害科学国際研究所にエリア・ユニット制度が発足したことを受けて、災害に際して有効に命や健康を守るための基盤となる学際融合研究をさらに活発に進めていくことを目的に企画されたものです。幅広く様々な研究領域の専門家をお招きして、その専門領域の研究の進め方や災害時の命と健康に関連する課題を紹介して頂き、今後の学際研究に向けて、医学領域の研究者とのディスカッションを深めることを狙いとしています。今回は第1回目の演者として、当研究所「減災システムの提案」ユニットの村尾修教授（地域・都市再生研究部門）をお招きして、「災害と健康」ユニットの富田博秋教授（災害医学研究部門）の司会の元、「都市環境と災害と健康」と題してご講演を頂きました。

建築学や都市デザイン的基本的概念をご紹介頂きつつ、建築学の大学院在籍中に阪神淡路大震災が発生したことから、都市防災研究の領域に足を踏み入れられ、阪神淡路大震災後の研究により fragility curve という概念を導入した都市防災のあり方の検討を行うなど、防災を軸とした都市デザインの研究領域を牽引して来られる中、「静岡県／医療機関のための地震防災マニュアル作成の手引き」の策定や医学雑誌「公衆衛生」に「災害に強いまちづくり 一環境道路による都市の将来構造一」を掲載される等、医学・医療との接点の重要性に着目してこられていることをご紹介頂きました。減災に対応する医療施設を含む都市・建築空間の最適化や活用に関する提案および医学と学際研究を進める上で有益な情報についてご紹介頂きました。講演とその後の討論を通して、稀にしか生じない大災害から体系だった学問体系を構築することの困難さと課題などについて議論がなされた一方、福祉・医療に関する建築設計資料集成や透析施設の機能継続に関する調査研究等の例を上げ、災害にレジリエントな医療体制や災害後の医療対応の体制整備に向けた建築学と医学との融合研究のあり方等が示唆されました。



会場の様子



村尾修教授